
『真紅の眼』

くらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『真紅の眼』

【Nコード】

N1475R

【作者名】

くらら

【あらすじ】

——遙か未来、労働から解放された世界。享樂を貪る人間と全ての機械人形たちは、一部の優れた人間によって管理されていた。

0 あらすじ

0

—— 遙か未来。

外見が人間と同様のロボットが実用化され暫く経った世界。

それとも、第三次世界大戦が終結し、国という隔たりが無くなった世界。

もしくは、その大規模な戦争で国家が解体され、全人口の大半が失われた世界のこと。

しかし、同時に人は得た。

これこそが幸福の究極といえるだろう『楽園』を。

地球に残された僅かな人間と労働に従事する多くの機械人形、

そして導入間の無いクローン人間の三者が共存する全く新しい世界。

人が享楽を貪り、向上を求められず、労働や面倒事に一切の時間と手を染めずに住む世界。

それは、過去多くの人間が渴望した『楽園』の姿だった。

人はその『楽園』に歓喜し、祝福し、抱擁し、もてなした。

『楽園』の誕生から長い年月、多くの人間がその幸福を享受し、心酔し、そして傾倒した。

しかし、そんな世界でも常識とは無縁な人間も中には存在する。

全人口の9割を占める墮落した人間『下級人』と、

人間の代わりに労働に従事する機械人形とを管理する機関、

僅かな優れた人間と有能なクローン人間ら『上級人』により組織された研究組織『管理機構』、

無能な『下級人』と墮落の要因となった機械人形は、

常にこの『管理機構』によって管理・掌握され、そして保護されていた。

そんな中、買い物や食事、趣味や娯楽、進歩した生活技術の優位性をすら放棄し、

『管理機構』による管理から離れた、大森林の中心に居を構える変わり者の男がいた。

男は他の人間が存在すら知らない第四の存在を一人研究していた。

いわく、人でもなく、機械人形でもなく、クローン人間でもない存

在。

それでいて、人のようであり、機械人形のように頑丈で、クローン
人間のように優れた存在。

男はその第四の存在を、瞳の色から『真紅の眼』と名づけた。
レッドアイズ

1 敵襲

1

「——最終勧告だ、No.10653」

モニタのスピーカから響く機械じみた音声を男は認識する。

どうやら森林の入り口、第一のバリケードが突破されたらしい。

映っているのはこの世界の中心を司る国家機関『管理機構』所属の装甲車。

モニタの画像が暗くよく見えないが、下がった窓から赤い光がちらちらと蠢くのが確認できる。

恐らくは戦闘用に改造された管理機構専属の機械人形・ユニットだろうが、数までは把握できない。

『UNIT』^{ユニット}、それは戦うことだけに特化し作られた機械人形でその巨体から機械兵とも呼ばれた。

百年前に勃発した第三次世界大戦で、管理機構が世界に放ち国家そのものを解体した人型の戦車である。

曰く武力を持つ一ヶ国に一機、機構がユニットを出撃させそれらが一機と欠けることなく帰還した日。

即ち僅か一週間足らずでそれまで世界に頑として存在していた国家という隔たりは無くなっていた。

武力を有する国家の全てが、ユニット一機と国家との圧倒的な戦力差を痛感し白旗を挙げたのである。

ユニットは人類にとって全く新しい兵器だった。

後の管理機構の言葉を借りるならこうだ。

それは人型で機動性に優れ、戦艦の主砲にも耐える堅固な装甲を持ち、独自の武器を有して戦う兵器。

全長三メートルの体軀は滞空時間は短いが空を飛び、無数のミサイルを避け、音速のステルス機を打ち落とす。

ユニットは国家の技術水準の百年年先に行く未来の兵器だった。

ゆえに、当時の国家の戦力では防戦すらままならなかったのだろう。その戦争以降、UNITは史上最強の兵器として世界に認知されることになる。

同時に管理機構は世界の中心となり、世界は機構によって管理される一つの国家となった。

男はそこまで思い出してから、ふうと一息。

白衣の胸ポケットから一枚の黒塗りのカードを取り出した。

カードの下部には以下の数字が刻印されていた。

——下級No. 10653。

これが管理機構につけられた男の識別番号だった。

男を含むこの国多くの人間には名乗る名前が無かった。

名は管理機構に所属する人間しか持つ事が許されていなかったからだ。

人間は二種類に分けられる。

どこかでそんな台詞を聞いたことがあるが、この国ではそれこそがおおよその真実だった。

管理機構に所属する人間とそれ以外の人間がこれにあたる。

機構に所属する人間は上級人と呼ばれ、人権が守られ名乗ることが許される。

同時に上級人は機械人形と一部の人間を管理する仕事を与えられ、一等地の住宅を得る。

対しそれ以外の人間は下級人と呼ばれ、人権を剥奪され名前の代わりに識別番号が与えられ管理される。

下級人は機構から一生分の安全と自由を保障され、居住区の中から狭い一室を与えられる。

子供の頃は自分に名前が無いとはなんと不便な事かと思ったものだが、今にして思えばそれは男の杞憂に過ぎなかった。

男が過ごしてみても名前なんてものは日常生活を送る上で一切必要無かったと気付くのにそう時間はかからなかった。

何故なら管理される多くの人間は下級人となった時点で、人としての意識を既に放棄していたからだ。

面倒な事は全て機械がやってくれる利便性を超越した現代においてそれは当然の帰結だったのだろう。

人はやがて外に出なくなり、与えられた一室に籠り、機械人形と戯れ、擬似的な世界に己を埋没させた。

食料や物資の購入も機械人形、ひいては機構の管理の元行われる為、人は次第に他人と接することすらも少なくなっていた。

故に、下級人には外で使う名前なんてものは必要無かった。

彼らはただ生きているだけの人間に過ぎない。

夢の中で、居住区の中で、自分の支配下にある機械人形に呼ばれる仮の名前だけあればよい。

そう、彼らには名前なんてものは必要なかった。

必要なのは彼ら機構に管理されるための記号だけ。

故に、管理されるだけの生き物と化した彼らには、名前の代わりに管理機構から識別番号が与えられた。

彼らは管理機構によってただ生かされているだけで、人権なんてものは存在し得ない。

それでも、多くの人間はそれに気付こうとすら、否気付くことすらできない。

それほどまでに人は既に墮落し、享樂を貪り、ただ時間を浪費するだけの存在に成り果ててしまっていた。

この世界には人としての誇り等とうに捨て切ってしまったものたちで溢れている。

逆に人として誇りを持つものは己の知識の向上に努め、人権を確保すべく管理機構に所属した。

しかし、非公式ではあるが白黒で割り切れない三種類目の人間もまた男のように存在する。

管理機構に抵抗する逸れ者、『逸脱者』。

ただ、人間すらも管理されるこのご時世にそんな存在が許される筈もない。

男はカードを裏返し、そこに印刷された一文を口に出してみる。

「管理・・・機構」

管理機構、過去に一部の有能な研究者たちが集まって設立した組織。

ただ生きているだけの人間とこの世界に存在する全ての機械人形を管理する機関で、

最近では、導入間も無いクローン技術を駆使し、より有能な人材で組織を再編成しているらしい。

管理機関は国家に変わる存在でこの国のトップに君臨している。

よって、この機関に逆らうということはそれ即ち国に逆らうことと同義となる。

つまり、今ここで最終勧告を受けている男は非常に危険な状態と言わざるを得ない。

例えばこのまま投降したとして、待ち受けているのは極刑か死刑か。

——ならば。

「——ならば、ここで捕まっては元も子も無いな」

男はモニタの脇へカードを挿入する。

突如、部屋中に鳴り響くサイレン。

その余りのけたたましさに、隣の部屋からライフルを胸に抱いた少

年リリイが駆けつける。

「・・・ジン、敵襲ですか？」

リリイが焦った声色で聞く。

男は黙って頷いてみせた。

「奴らがここに到達するまで一時間と無い・・・武器・弾薬、資料関係は破棄する。

あんたは『真紅の眼』を連れ先に第二研究所『地下ギルド』へ行け。

機構の機械兵『UNIT』は迎撃トラップが足止めするはずだ。後は打ち合わせ通りに動く」

「了解しました、ですが・・・」

リリイは試験管の中で眠っていた黒衣の少女『真紅の眼』を担ぎジンへ振り返る。

無理はしないでくださいね、小さい口はそう言って扉の向こうに消えた。

男はそれを確かめると、モニタに接続しているキーボードにパスを打ち込む。

一瞬後、モニタに映る一列の文字、『データ消去』。

その文字を横目で見つつ男は一人ごちた。

「やれやれ、俺もヤキが回ったもんだ」と。

流れるような動きで男はリリイの残したライフルを手に取る。振り向きざまにライフルを構えた男はその赤い瞳と対峙した。男の目の前にいるもの。

それは管理機構の新型だろうか。
赤い単眼を光らせた青いユニットが静かに佇んでいた。

2 疑惑

2

最終勧告。

その言葉を口にした時、西条は動揺を隠せず装甲車の中で一人爪を噛んだ。

今回の任務、逸脱者の捕獲に派遣された人間は西条ただ一人だけだった。

装甲車の中には、追隨する戦闘型機械兵UNIT三機も同乗しているので、

まったく西条一人という表現は些か間違っているといえなくもないのだが。

それにしても西条は顔をしかめて煙草の本数を増やさざるを得なかった。

殺す為に造られた機械兵と狭い車内に押し込められてのドライブは西条にとって苦痛でしかなかった。

「・・・せめて、人間は二人必要だろうよ」

西条は紫煙を吐き出して誰にともなく呟く。

全人口のおよそ7割が先の大規模戦争で失われた事を考えれば、その希望は果たして贅沢と罵られるだろう望みであろうか。

別に西条は喋る事が好きな性格ではない。

否、そもそも管理機構に所属している人間の中にはそれ程雄弁な者はいなかった。

室内で顔を合わせたとしても、西条はまだ末端の人間、得られる情報も多くはない。

自分も含めて彼らはただ黙々と上から下りてくる仕事をこなすだけ

である。

それでも、と西条は己の自己完結に食い下がり、それが無意味なことでだと気付き溜息をつく。

二人ならまだ救いはあっただろうに。

そう思いながら、西条は横目でちらりとミラーを覗き込んだ。

背後に積載されている三機の機械兵の赤い単眼がちらりと眼に入っ
た。

それは黙ったまま微動だにすることなくマネキンのように外の景色に視線を飛ばしていた。

ユニットは戦闘に特化している為なのか、他の機械人形とは異なり対話というものを行わない。

ゆえに西条はこの第一バリケードまでほぼ無言で一人煙草をふかしていた。

まったく、相談できる相方がいないというのは実に不便なものだ、と西条は一人ごちる。

「——『逸脱者』はC区画の大森林奥に在るとのことだ、

エリートである君の活躍を期待しているよ、西条くん」

出立前に機構幹部の雪平に言われた言葉を西条は思い出す。

エリート、その言葉は機構の中での西条の代名詞だった。

入社試験で主席入社を成し遂げた西条は自分を機構の中でも特別な人間だと思っていた。

自分こそが上級人となるために生まれてきた人間なのだと西条はいつも考えていた。

同僚たちより一歩先へ進み、上層部から直々に郊外の任務を任される自分。

墮落した下級人の管理より遥かに魅力的な今回の任務に西条は心躍らせずにはいられなかった。

例えばそれが『逸脱者』の探索と捕獲という地味な任務であったとし

ても。

とはいえ、どうして捕獲なのだろうかと西条は一人首を傾げる。

『逸脱者』は機構ひいては国家に仇名す反逆者である。

ならば、任務は捕獲ではなく排除ではなからうかと。

機構の考えに反対するものが捕獲したところで大人しく下級人になど下るのだろうか。

それとも捕獲することで何か別のメリットでもあるというのか。

西条は煙草を灰皿に押し付け、何気ない動作で後部座席を振り返った。

暗い車内で光る三つの赤い単眼が目飛び込んでき思わず西条は身震いする。

コピ
ー
UNIT。

世界で史上最強と目される人型兵器。

正式名称は『連合国家（つまりは管理機構）の独立技術（Union Nation Independent Technology）』。

かつての大規模戦争、第三次世界大戦で国という隔たりを破壊した歩く戦車である。

その戦闘能力は一機で国を屠るほどで圧倒的な制圧力を誇る。

事実上ユニットを倒せるのはユニットだけと言われており、

只一度の例外を除いて、百年前から九機が現在も稼動している。

普段は各地で今も続く反乱軍の粛清に使われているが、今回西条が支給されたのはその九機の中の三機。

一機だけで国を落とすユニットが三機も必要となると、今回の反逆者がいかに危険な相手だということが西条にも認識できた。

西条は鞆から機構専用のノートパソコンを取り出すと、ナビゲートシステム『IL（Information Log）：イル』を起動させる。

これは、機構の第二の頭脳と言われるマザーコンピュータ『Information log keeping system：イルクス』と連携し、

過去全ての情報を検索できる機構独自の情報検索システムである。

西条はすぐさま検索ワードに『10653』と打ち込み検索をかけた。

一秒とかからずにパソコンの画面に10653の顔写真とプロフィールが現れる。

「——に、・・・と。」

小さな声がその情報を西条に伝える。

『IL』には音声ソフトも導入されており、ある程度の会話も可能となっている。

一人きりで話す相手のいなかった西条は自然とスピーカの音量を上げていた。

「——が、今回のターゲットです。」

識別番号No.10653、三十年前に反管理機構を掲げる組織に誘拐されたクローン体の一人。

そのクローンはかつて管理機構で『博士』と呼ばれた人物が元となっています。

現在の管理機構でも『博士』のクローンが数人在籍していますが、No.10653は中でも別格です。

彼はクローン人口千人を超えるクローン体の中で唯一の奇跡、オルタナティブクローンなのです」

西条は聞きなれない単語をイルに聞き返す。

イルは西条の疑問に淀みなく答える。

「——オルタナティブクローン、それは外見や能力だけでなく記憶の複製にも成功したクローンです。

ユニットが世界に姿を晒してから今年が丁度百年目、世界より百年先に進んでいた機構の機械兵も、以降磐石とは限りません。

幸い管理機構クラスのユニットはこの百年間誰も生産できていませんが、

それは逆に管理機構も博士がいなくては九機から数を増やすことが出来ないことを表します。

既に十機いた機械兵の内一機がロストしており、機構としては一刻も早く彼を保護したいわけです」

そうだ。

西条は一人パソコンの前で頷く。

ユニットのロスト、十機の中の一。

その報告を受けてから一週間と断たない内に上層部は自分に任務を与えた。

UNITを三機も与えられた上での処分ではなく捕獲という特例の任務にその時は首を捻ったものだ。

しかし、他の人間ならまだしもなぜ百年もユニットを所持している機構が増産に踏み出せないのだろう。

西条はイルにその旨を聞く。

「——ユニットのコアを造れるのは博士」

音声ソフトの説明を聞きつつ西条は思い出す。

第三次世界大戦でたった一機のUNITが大国に白旗を上げさせた事を。

過去どれほど大規模な反乱があってもUNIT一機のみで全て解決されてきた事を。

人を超す三メートルのユニットは管理機構に異を唱えた勢力、国でさえもたった一機で沈めてきた。どれほどの銃弾を受けようとも、どれほどの爆薬で周辺もろとも焼き尽くされたとしても、

ユニットはその圧倒的な装甲と性能で全てを破壊してきた。

それが今回はどうだろうか。

たった一人の捕獲の為に、三機ものユニットが支給されている。

オルタナティブがいかに博士のクローンとはいえ、この万全すぎる戦力はなんだろうか。

西条はオルタナティブ捕獲の背後に何かある、と思わずにはいられなかった。

西条の所属する管理機構は優秀な人間が一人消えても、機械人形である程度のカバーは出来る。

それほどまでに今日の管理用機械人形の質は進歩しており、数もそれなりに生産されていた。

しかし、抜けた人材が桁外れに優秀すぎるリーダー格であった場合は別である。

技術の革新。未知の技術発展にはどうしても突飛な創造力が必要不可欠だった。

明確化された仕事は演算・処理能力に優れた機械人形のほうが優秀であったが、

彼らには創造・思考という人間独自の行動をすることができない。

故に、個々の能力としては機械人形のほうが数段上ではあるが、

彼らを管理する存在として自分たちのような優れた人間が必要であり、

それが今日まで管理機構が存続してきた背景でもある。

だが、しかし。

そう呟いた時、音声ソフトが西条の後を引き継いだ。

「——西条様はユニットの三機同時出撃は不思議である、と。そうお考えなのでしょう」

自分の心の声を代弁した音声ソフトに西条ははっと目を見開いた。自分でも気付かぬうちに爪を噛んでいた西条は目を細めて音声ソフトに返す。

「そうだ、いくらなんでもおかしいだろう。

ユニットだぞ、史上最強の人型兵器だぞ、一機でもお釣りがくる筈だ。

それが、何故三機も・・・」

「西条様のお考えもご最中です。

しかし、オルタナティブひいては博士はその史上最強の対人兵器『UNIT』の発案者なのです」

「な・・・!!」

西条は驚き思わずパソコンに掴みかかっていた。

「つまり、我々上層部は博士の記憶を持つオルタナティブならば史上最強のユニットを覆し、

その上に行くユニット？を開発していても不思議は無いと考えています。

なぜなら・・・」

「・・・なぜなら、原案さえ整えば後は優秀な機械人形が完成させてくれる、か」

「その通りです、西条様。

よって、先のユニットロスト事件はオルタナティブの仕業と機構は判断しています。

この百年間で、ユニットを造り出したのは博士ただ一人のみ。

我々機構はそれがどんなシステムで動いているのか、内部がどんな構造をしているのか。

その全てを知らずにユニットを万能の兵として使役してきました、過去もそして現在も。

しかし、世界が機構の技術力に追いつこうとしている今、その妄信が仇となっています。

また、ユニット？なる存在が実在するのなら、今回のユニット三機はある意味妥当な判断なのですよ。

一機が戦闘データを収集し、二機で波状攻撃を仕掛けるわけですから」

音声ソフトの返事に西条はふむ、と腕を組む。

これは厄介な事になったと顔をしかめる。

かつて管理機構でリーダーとして存在していた博士が事実上若返って現在も生きている。

その間博士は一体何をしていたのか。

腕を組んで背に体重を預けるものの答えは浮かんでこない。

思い浮かぶのは音声ソフトが例えたユニット？のおぼろげな存在と、拭い切れない不安だけ。

「考えても答えは出ない、か」

西条は一人溜め息をつく、と、運転席に座る機械人形に命令を出した。
出せ、と。

命令を受諾した赤い単眼が暗い車内の中を反射した。

3 博士

3

激しい轟音が男の耳に鳴り響く。

果たしてそれは昨夜から地上で降り続けている雨が雷雲に変わった所為か、

はたまた、要塞と化したこの地下ギルドに管理機構の奴らが最新型の機械人形でも投入してきたのか。

後者だと面白いことになるんだがと男は一人心躍らせたが、それも束の間地上の雨音で現実に呼び戻される。

一つ舌打ち、誰にもなく大げさに欠伸をしてから男は顔に掛かったアイマスクを外す。

ソファに片手を預け長くなった前髪を掻き揚げる。

またいつのまにか眠っていたようだ。

男の身体には毛布が掛けられていた。

胸元から草臥れた煙草を取り出し火を点ける。

「——あれも、暫くは只の地蔵か」

一人呟いてから、目の前に置かれた淹れたての珈琲に自然と手を伸ばす。

立ち上る湯気、上品な香りに男は思わず目を閉じる。

一口含めば口内に広がる芳醇な味わいに身体が震える。

ああ、と声を洩らさずにはいられない。

最高級の豆、そして最高級の淹れ手ともなると、やはりいつ飲んでも珈琲とは格別なものだ。

そのまま、二度三度と口へ運ぶ内にカップはいつしか空になっていた。

男はテーブルにカップを置き、『珈琲』と一言告げる。

すると、それだけでカップには再び湯気の上る珈琲が注がれた。視界の隅に映る小型の自動珈琲注入機を一瞥し、男はカップを口へ運ぶ。

男はふむ、と満足げに口元を傾けると、目を細め一人頷く。

この苦味こそ珈琲の醍醐味、やはり珈琲に砂糖は邪道だなど。

あんなものの珈琲を飲んでる姿を周りに見せたい輩が入れるものだ。珈琲に不純物など必要ない、何せ最初から完成されてるものなのだから。

そう、珈琲こそ至高、珈琲こそ王者。

つまり何が言いたいかというと、珈琲好きの僕は珈琲王子というわけだ！

わつと両手を挙げて歓喜に打ち震えた瞬間に我に返り、男は腕を下ろして小さく咳払い。

そうなんだよと一人何度も頷いて完結すると、目前で反対ですとの声が上がった。

「反対です。その意見には反論させて頂きます」

男の向かい側に湯気の上がる珈琲をテーブルに置き、呆れた様子で首を振る人影がいた。

いつから相對していたのか目の前の美少年が反対ですよと小さな声で再度意思表示する。

その人物は一見人のように見える。

しかし、それは精巧に造られた人の形をした人ならざる者だった。

——機械人形。

現代の技術水準では別に珍しくも無い有触れた人型の機械。

開発初期の段階では危険が及ぶ仕事や任務の為にという目的で作ら

れていたが、

一般家庭にも広く普及された頃には、多くの人間の趣味嗜好を満たす分野で売買されるまさに人形となっている。

それゆえ、危険事業や重労働にはほぼ機械人形が従事し、人は多くがそれを管理する仕事に就いていた。

ただ、現代の機械人形はまさに精巧に造られた生きた機械であり、年月と共に機械技術が進歩するのと平行して、大きな失敗というのをもまた無くなってきた。

よって、現在では多くの人間が機械人形に労働を預け、享楽を暴食したただ機械人形と戯れ己が器を狭める輩で溢れていた。

自由を与えられても、男のように己を縛り器を広げようとする人間の中にはいたがそれは少数で時間の問題でもあった。

またその中でも更に少数の博識な知識を持つ研究者層は、墮落した人間と全ての機械人形を管理する為、

『管理機構』を設立、昨今導入されたクローン技術も駆使し、現在ではこの管理機構が国家の中心となって全ての権限を担っている。

「・・・僕には砂糖多めに入れて欲しいな」

そう言つて微笑む機械人形に対し、男は角砂糖を3個彼のカップの中に運ぶ。

それだけで少年はにこつと微笑み、砂糖入りの珈琲を口へ運ぶ。

一息ついてから至福の表情を覗かせる少年。
ありがとうございます、と男に礼を述べる。

多くの人間が傾倒し人類の墮落の要因ともされる機械人形。

基本的に、一国民に一機支給される（富裕層は数機を所持）機械人形は主人に従順で、常に敬い、愛し、

主人に危険が迫った際には我が身を挺して守る等、人の求める理想

の姿をモデルとしている。

普及当時は外見もほぼ機械と変わりなかったが、人の人型への執着心とは凄まじいもので、

それから五年と掛からない内に世には人と変わらない姿の機械人形が闊歩していた。

生殖能力的な観点から生身の人間を求めるものも少なからずいたが、やはり墮落した人口の多くは己に逆らわず理想的な恋人を求め機械人形を求めた。

ただ、やはり人外ということで欠点もあり、行動はプログラムされた域を出ることはなく、

不規則な思考や感情の表現などといった人間的な行動をすることはできない、とされている。

ごく一部では散りばめた言葉や思考プログラムからランダムに選択させる事で、

擬似的に思考という概念を垣間見せる事に躍起になっている輩がいるらしい。

しかし、それでもそれはあくまで思考という位置からは遠く離れている。

機械人形に必要な思考とはそういうものではなく――

「博士もたまには砂糖入りの珈琲飲んでみればいいのに、きつと気に入ると思うんだけどなー」

そう、自分の立場、感情を優先した意見を述べる、これに尽きる。いやはや自分がここ数年で確立した技術は素晴らしいな、と男は何度も頷いた。

その男のいつもの如き様子に機械人形は溜息をつき、『博士』と男を呼んだ。

博士と呼ばれた男は低く笑いながら胸を張ってみせる。

「なんだいリリイ、この『博士』になんの用かな」

どうやら男は博士と呼ばれる事がとてつもなく快感らしい。まるで自分の名前は博士だとしても言わんばかりに胸を張る。リリイと呼ばれた機械人形はむう、としかめ面をしつつ博士に質問する。

「博士、どうして僕は男性なのでしょう、博士も男性ですので、普通なら助手は女性の筈ではないですか？それに男の僕にリリイという女性名は些か不釣合いな気が・・・」

リリイはちらつと横目で鏡を通して自分の姿を確認する。年の頃は十代半ばといったところだろうか。

中性的な顔だちに白い肌、やや低めの身長に細めの体躯。

髪はやや長め、肩に少し掛かる程なので結べばポニーテール位は出来るだろう。

視線を下にずらす。細い首、胸は男なので勿論無い。

着るものは白衣しかないからと渡された寝間着用の長めの白衣で、いつの間にか膝頭が露わになっていて朱が差し込む自分の顔が目に映る。

慌てて白衣を引っ張り膝を仕舞う。

あ、と声が出る。

反射的に小さく洩らしてしまった自分の声は少し高めのソプラノだった。

と、そこまで一人分析し、はたと気がつく。

少々不安になりつつ上目遣いで博士を見上げる。

その視線に気付き、博士はややつと声を上げ両手を顔の前でぶんぶん振って見せる。

「待て待て！ 誤解してはいかんリリイ君、僕はノーマルだよ！

確かに、君はそっち方面でも活躍できるかもしれない外見ではあるが、

僕が男の機械人形を望んだのはそういう意味合いではないから、安心し給えっ」

博士の必死の否定に未だ納得できないリリイ。

ちよつと意地悪してみたくなって、シャツの肩口を少しずらし覗かせて見せる。

上目遣いのまま「本当ですか？」と問いかけ。ちよつとうじうじと左右にグラついてみせた。

博士はそれを見るや否や顔を真っ赤にして、顔を背ける。

リリイは博士の反応に目を細めて、「初心だな」と呟く。

博士は少し冷めた珈琲を一気に呷ると、大きく溜息をついた。

「・・・そう、僕は初心なんだよ。

だから、助手が女性では研究も手につかない有様だね。

かといって、むさ苦しい男が助手では居心地が悪い、だから・・・

」

「——だから、中性的な顔立ちの男である僕なんですネ」

博士はリリイの言に頷きを返さず、大きく咳払いをして応える。

リリイは年の割りに女慣れしてない博士を呆れた様子で見つつ、肌蹴た白衣を直す。

確か、博士の年齢は三十代半ば頃ではなかっただろうかと一人思い出す。

ずっと研究一筋で色恋には無縁だった博士。

自分たち機械人形が溢れているこの現代でこんな人間も珍しいと思う。

そんなことを考えられる機械人形もまた自分以外いないのだろう、

とリリイは一人結論づけた。

そう、ほんの一ヶ月前から自我を持つ事が可能になったリリイこと機械人形は世界で只一人だった。

機械人形は生産されると同時に独自のネットワークを与えられる。

それは機械人形全機をカバーするもので、個体の位置情報の確認や最新のアップデートを自動で行う為のものである。

同時に、各個体は最新の機能やニュース等もこれを介して確認することが可能となっている。

これにより、未だ『思考する機械人形』というトピックが確認できないことから、

今このように思考している機械人形は自分以外存在していないと結論付けることができる。

リリイは自分に思考する、という能力を与えてくれた相手を――
目の前の博士を見つめた。

博士は一人「そうなんだよ、『性的な意味じゃなくてね』」と後半を強調し何度も頷いていた。

とはいえ、そこまで否定されると助手もなんだか嬉しくない。

なぜなら全ての機械人形は生産段階で主人を愛する様にプログラムされているわけだから、

そんな相手から別に好きでも無いと告げられればそれはそれで面白く無い。

という結論を出せるのも思考する事が可能な自分だけなのだろうと頭の隅で思いながら、

リリイは自分の髪をゴムで束ねてポニーテールを作る。

上目遣いで博士を見つめておねだりのポーズ。

「ふっ……!？」

二杯目の珈琲を飲んでいた博士は盛大に吹き出す。

博士の口から飛び出した珈琲の飛沫が盛大に床を濡らした。

リリイはもう博士のその反応だけで十分だった。けらけらと笑いながらテーブルの上に載っている布巾で床を拭く。

「もうっ、博士ったら初心なんだから・・・」

博士はううと呻きながらソファのクッションに頭を突っ込んでいた。

年齢に不相応な程両足をバタバタさせている。

リリイが布巾を洗いに笑顔のまま台所へ向かう。

その姿を膨れ面で眺める博士。

博士は助手が台所への扉を閉めたのを確認してから起き上がる。

胸元から煙草を取り出して一息ついた。

やれやれ、と声が出る。

「リリイもよく笑うようになった、もう機械人形という枠からは卒業だな」

博士は一人呟き煙を吐き出すと、背後を振り返る。

「思考と感情はクリア・・・とすると、次の僕の仕事はこれかな」

博士の目の先にあるもの。

それは身の丈二メートル程のガラス製の試験管。

中は水で満たされ、時々気泡がゴポゴポと音を立てる。

博士はその試験管に近寄ると煙草の煙を吸い込んで大きく吐き出した。

——そろそろ。

「そろそろ、目覚めてくれないかな・・・真紅の眼のお姫様」

試験管の中には黒衣に身を包んだ短髪の女の子がゆらゆらと漂っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475r/>

『真紅の眼』

2011年10月8日19時13分発行